

朗読者、Mちゃん

その女の子は、希望した女子高校に合格して、絶対「合唱部」に入るんだと思い、日々勉強していた。

受験はうまくいき、まちにまった入学式の日。

「いってきまあす！」

女の子は、声をはずませて家をでました。

「初めての登校だから自転車はやめたほうがいいでしょう？」

とお母さんが言うのに、

「へいきへいき」

とばかりに愛車にとび乗ったのでした。

そしてその女の子は、陽気に自転車をこいでいると、交差点にさしかかりました。

するととつぜん、目の前に穴があき、落ちて行ってしまいました。

女の子はあまりに一瞬だったので悲鳴もでませんでした。

ですが女の子はふと思い出したのです。

中学三年生の秋のころ、塾の帰り道でここを通ったことがありました。自転車で帰っていると、道に花束が置いてありました。

人がいたので、よけるためにはしの方に行くと、何かをふんだ気がしました。けれども女の子は、それを花束だとは知りませんでした。

翌朝のニュースを見ていた女の子は、きのう何かをふんだあの交差点で、男の子が事故で死んだことを知りました。

女の子は、その男の子のことを、「かわいそうに」とぐらいにしか思いませんでした。

ですが、ちょうど花束の置いてあった「あの場所」が、今落ちている「この穴」だったのだと、思い出したのです。

すぐに学校にもれんらくが入りました。

これまで、どことなく華<sup>はな</sup>やいでいた職員室が、かたまりました。ただ、  
「入学式」は予定どおりおこなわれました。

式が終わり、先生と生徒は、それぞれの教室に入りました。先生は、  
生徒一人一人の顔を見て、一言、二言ずつ言葉をかわしました。

一つだけ、空席がありました。

「なぜ空席があるの？」

などの声がところどころ聞こえましたが、先生は、今日だけはその女  
の子のことを言いませんでした。

朗読者、Mちゃん

4

その夜、女の子が消えた場所を担当の先生が通ると、ぽっかりと一つ大きなあながあいているのを見つけたのです。

そして中から助けをもとめる声がしたのです。

先生は、少し考えこんで、こわかったけれど、勇気を出して、手をのばしました。

朗読者、H君

「徐々に、徐々に」

そう心の中でさけびながら、どんどん、どんどん手をのばしていきました。おくに、手をのばした所で先生がいきをのみました。

なかに、「にゅっ」としたようなものがあつたからです。

そこでも勇気を出して、ひっぱりました。ひっぱりだすと、中から人間の女の子が出てきたのです。

その子は、あの「消えた少女」だったのです。先生はとてもびっくりしました。

次の日からは、元気に登校しました。夢の「合唱部」にも入りました。  
友達もたくさんできて、毎日たのしい日々をおくっていきました。  
けれども、穴にすいこまれた時のことは、思い出せませんでした。と  
てもふしぎな話です。

消えた女の子は、穴の中ではいったい何をしていたのでしょうか。